

連続講座「遺跡が語る戦国時代の京都」第 4 回

戦国時代の寺と城

京都市文化財保護課保護第一係長 馬瀬 智光

1 はじめに

戦国時代の幕開けとなった応仁・文明の乱（1467～1477）において、洛中だけでなく洛外の多くの寺院が戦場となり焼亡します。その後も寺院は戦場となり続けます。なぜ寺院が戦場となったのか、なぜ寺院は聖域とならなかったのかを探るきっかけとなればと考えています。

また、豊臣秀吉が御土居（洛中惣構）で囲んだ範囲を洛中と考えた時、その範囲で応仁・文明の乱以前に遡る建造物が残るのはわずかに東寺（教王護国寺）と大報恩寺（千本釈迦堂）だけです。なぜこの 2 寺院がかろうじて残ることができたのか、最近の事例もふまえて考えていきたいと思えます。

2 京の社寺

(1) 東寺（教王護国寺）

応仁元年（1467）8 月 23 日に大内政弘が東寺に陣を取ったことがわかります（『東寺長者補任』、『経覚私要鈔』）。その後、乱中はほぼ西軍の支配下にありました。文明 3 年（1471）には（『廿一口方評定引付』文明 3 年 12 月 20 日条）、山城守護畠山義就方の年貢引き渡しを拒んだ際に、本来軍を発向すべきであるところ、「東寺は大切な大伽藍であるので」とされています。また、『廿一口方評定引付』文明 3 年 2 月 5 日・同 7 日条他）に、畠山義就が「屋形祈祷之事」を申し入れし、「畠山殿母儀」も東寺の西院に参詣して祈祷を依頼するなど、東寺の伽藍を擁護し、その祈祷の恩恵に浴することに感心を持っていたとされています（酒井 2011）。

(2) 千本釈迦堂（大報恩寺）

現在は真言宗智山派であるが、創建後しばらくして天台宗となっており、江戸時代前期までは天台宗であったと考えられます。応仁・文明の乱から本堂は守られましたが、その理由はよくわかっていません。

(3) 法華宗二十一カ本山

『京都の歴史 3－近世の胎動－』によると、天文初年の本山の位置は、上京には、妙顕寺（二条西洞院）、住本寺（二条堀川）、妙伝寺（一条尻切屋町）、妙覚寺（二条衣棚）、頂妙寺（高倉中御門）、

本満寺（東洞院土御門あるいは今出川新町）がありました。下京には、本国寺（六条堀川）、妙満寺（錦小路東洞院）、立本寺（四条櫛笥）、本能寺（六角大宮）、妙蓮寺（綾小路大宮）、上行院（六角油小路）、本法寺（三条万理小路）、妙泉寺（三条油小路）、本隆寺（四条大宮）、本禅寺（四条油小路）、本覚寺（三条猪熊）、宝国寺（本国寺隣接）、学養寺（四条南辺）の諸山があり、その他所在を確認できないものとして、弘教寺と大妙寺があります。

これらの二十一箇寺は、万里小路（東）、大宮ないし櫛笥（西）、六条（南）、近衛あるいは中御門辺（北）に限られた範囲に立地し、当時「洛中」と呼ばれる範囲と一致します。

妙顕寺は、東は西洞院、西は油小路、南は三条坊門、北は二条大路をかぎる南北二町の寺域を占め、また本能寺は東は大宮、西は櫛笥、南は四条坊門、北は六角を境とする一町四方という広大な境内を天文法華の乱まで占めていました。

洛中の法華本山は、この立地条件に加えて、本国寺、本能寺、妙顕寺などの例にみられるごとく、その多くが堀や土塁や「構」と称される防衛施設を備えていたことがわかります。

(4) 禅宗寺院

五山十刹諸山など、室町幕府による統制を最も受けていた禅宗寺院は、戦国時代を通じて被災することが多かったと考えられます。上京の構に隣接する相国寺をはじめ、制度の頂点にある南禅寺や五山の天龍寺、建仁寺、東福寺や十刹も多くが灰燼に帰しています。

3 具体的事例

(1) 嵯峨遺跡

天龍寺の塔頭群で構成される嵯峨遺跡では、2013 年 5 月～6 月に行われた発掘調査（村尾他 2013）により、室町時代中期（Ⅰ期）、室町時代中期後半（Ⅱ期）、室町時代後期（Ⅲ期）、室町時代末～江戸時代（Ⅳ期）の 4 時期の遺構が検出された。特にⅠ期の堀 SD16 は、北東から南西方向に延びる堀で、全長 18 m 以上、幅 4 m、深さ 1.7 m を測ります。断面は逆台形で、最下層は流水痕跡が認められます。この遺構から出土した遺物は少量であるものの 15 世紀中頃とされ、発掘担当者は天龍寺の焼失した文安 4 年（1447）以降に堀が埋め戻された可能性が高く、中世寺院を囲んだ防衛的な堀と考えています。

『応永鈞命図』から、この堀は天龍寺の塔頭「正持庵」、「華嚴院」、「椎野寺」のどれかに相当する可能性があり、担当者は最も近接する華嚴院の北限を限る堀と考えています。

(2) 御影堂新善光寺

2013 年の発掘調査（水谷 2013）で、町尻小路（現在の新町通）東側溝を踏襲した形で、堀状遺構の溝 305 が検出されました。この溝は幅 3 m、深さ 1.1 m を測り、断面は逆台形を示しており、16 世紀前半～中頃のものと考えられます。11 世紀後半～12 世紀前半の平安時代の町尻小路東側溝である溝 433 は、すでに幅 3 m 近くあることから、戦国時代の享祿 2 年（1529）に五条橋西詰南側にあった御影堂新善光寺が、平安京左京五条三坊五町のこの地に移転した際、堀に近い規模を持つ

側溝を寺院防衛に利用したと考えられます。

（３）本能寺城跡

2007年度に行われた3回の発掘調査により、本能寺城跡の位置が明らかになるとともに、城郭化に伴い西洞院川が埋め立てられたこと、内堀と考えられる石垣を伴うL字形の溝(内堀の南辺と東辺)が存在することがわかりました。2012年の調査は、本能寺城跡の推定場所である平安京左京四条二坊十五町の北東隅を調査地としており、2007年の内堀の延長に続くものと想定されていました。しかし、この調査では堀の延長は認められず、従来の復元案の再考が必要となりました。調査担当者である家崎孝治氏の復元案を紹介します(家崎 2012)。

L字状の石垣を伴う堀は、この調査地の南辺部で西側に屈曲する可能性が高くなりました。その場合、この屈曲後の東西の堀を北辺とした場合、南辺と北辺の間は約30m、堀の幅を除くと南北幅は15m前後となるため、この空閑地に御殿のような主要な建物は想定しにくいことから、「出隅^{ですみ}」ではないかと推定されます。

さらに、西洞院川の変遷についても明らかになりました。溝411(西洞院川)の西側肩口から出土した土器は16世紀前後のもので、その頃に西洞院川が西側へ拡幅されたことを示しています。また、溝411に流れる溝193の出土遺物も同じく16世紀前後のもので西洞院川の西側への拡幅と同時に開削されたと考えられます。これらの西洞院川の改変は、応仁の乱以降の下京総構の軍事的再構築を示すものと考えられます。

さらに、本能寺の京への復帰建立時期である天文16年(1547)においては、西洞院川の西肩部のみを整備したのではないかとされています。

天正8年(1580)に村井貞勝が本能寺を城普請する際に、西洞院川の西半部を8m以上の幅で埋めて、西洞院川を外堀として整備した可能性が高いと考えられています。この西洞院川の西半部の埋め立て時期については、2007年度調査の本能寺城の南堀が西洞院川を一部埋め立てた後に開削されたとする調査結果と一致します。

（４）法華寺院と堀

2011年に平安京左京四条一坊十三町の発掘調査で、調査区中央で検出した堀78は幅6m前後、深さ1mを測り、断面は逆台形を呈します。堀底には厚さ0.1mほどの植物遺体を含む泥土層が堆積していました。北壁断面の観察結果から、堀は東肩より埋められた段階で一度再利用されていることもわかりました。堀内堆積土からは12～13世紀代の土器・瓦類が大半を占めていましたが、数パーセントの割合で16世紀代の遺物も含まれていました。

2007年に南西に約20m離れた調査において、同時期同規模の室町時代後期の堀跡(SD115)が検出されています。堀78と堀SD115の心点距離は28mあります。堀SD115は櫛笥小路の中央部に沿って掘られており、天文法華の乱(1532～1536年)に伴う構の一部と考えられます。この堀のすぐ南、四条大路を挟んで立本寺(妙覚寺)の構跡があり、北へ200m離れたところに旧本能寺の構跡が、また立本寺の左右には本隆寺の構、妙蓮寺の構、妙満寺の構、本禅寺の構跡などが四条大路

の南辺部に沿って建ち並びます。堀78と堀SD115間の内法は23mであり、建物を圍繞する堀としては間隔が狭く、この両堀は櫛笥小路の本来の道路機能を踏襲した形で旧本能寺と立本寺をはじめとする四条大路及び北面する五カ寺とを軍事的に結び付ける機能をもったものと考えられます。(家崎 2011)。

このような法華宗の台頭に対しては、『阿刀家文書』に「風聞のごとくんば、洛中九条条里里小路に寺の構と号し堀を掘り、上意の御沙汰を受けず諸公事これを裁許せしめ、地下人等に非分の儀を申し懸け、しきりに無数の巧をめぐらかし、わが党に引き入れ、諸宗に対し狼藉に及ぶ」と記されている(河内 2002)。

（５）讚州館・讚州寺の堀

溝2040は幅3.5m、深さ1.1mを測る。溝の壁面はほぼ垂直に立ち上ります。拳大から人頭大の河原石が大量に詰まっており、最下層には粘土層が確認でき、滞水した痕跡があることから堀であると考えられます。15世紀後半以降に埋め戻されています。溝2001は幅2.1m、深さ0.9mで、断面はV字形をしており、埋没時期は15世紀後半以降と考えられます。上京の構の惣構の内側にあることから、応仁・文明の乱の舞台ともなった「讚州寺陣」に関連する遺構であると、発掘調査担当者は考えています(持田 2013)。

（６）神護寺と高雄城跡

延暦年間(782～806)に和気清麻呂が創建した神願寺を起源しており、現在の伽藍以外にも現地踏査で多くの平坦地が確認されており、中世には多くの子院が存在していたことは明らかです(中居 2014a)。丘陵斜面の要害地にあり、最初に高雄に城を築いたのも神護寺です。

高雄城跡は桂川の支流清滝川の右岸に広がる丘陵の頂部に広がる城で、主郭のすぐ北側に巨大な堀切が2条あります。早くも建武3年(1336)に新田義貞に与した神護寺に対し、城郭を撤去するよう足利直義が求めています。応仁の乱時は不明であるものの、天文16年(1547)に細川国義が籠もる高雄城が細川晴元の攻撃を受け落城しています(『厳助往年記』高橋 2014)。

（７）如意寺跡と如意ヶ嶽城跡

如意ヶ嶽城跡は、東山丘陵の中央部に位置する大文字山の山頂に築かれた城で、保元元年(1156)の保元の乱で、如意ヶ嶽が利用されたことに始まり、文明2年(1470)や永正6年(1509)、永正17(1509)など度々利用されています。如意ヶ嶽を舞台とした合戦記事のあるものは、城ではなく、京と近江(滋賀県)を結ぶ如意越のルート上にある如意寺でのものが多いと考えられています。如意寺は天慶5年(938)には文献に表れ、応仁・文明の乱によって荒廃したと考えら得る園城寺派の山林寺院です(中居 2014b)。

（８）三鈷寺境内

三鈷寺は、善峰寺の北側に位置し、灰谷川と杉谷川に挟まれた標高494.5mをピークとする丘陵

東斜面の標高 320～430 m の部分を雛壇状に開削、造営された山林寺院です。

当寺は、比叡山の僧、源算上人の草庵「往生院」が承保元年（1074）に築かれたことに始まります。建久元年（1190）には天台座主を務めた『愚管抄』の著者でもある慈円に譲られます。文明 2 年（1470）3 月 8 日に兵火に遭い、三鈷寺は焼失しますが、中興の祖善空（十四世円慈和尚）が後土御門天皇の帰依を受けるなどして文明 14 年（1482）に仏殿が再建されます。寺に伝わる「天文十四年謄写西山三鈷寺古繪図」によると、本堂、客殿、庫裏、往生院の他、16 以上の塔頭が描かれています。近世の高石垣や創建の地である往生院域には三鈷寺の末寺であった勝持寺塔頭群の発掘調査で認められた石垣に類似する石垣が現存します（馬瀬 2014a）。

（9）史跡妙光寺境内

妙光寺は、標高 515.8 m の沢山をピークとする鳴滝丘陵の南端斜面地の標高 92～120 m の部分を開削、造営されている山林寺院です。花山院家（家格は清華家）の支流、藤原師継（1222～81）の別号に築かれています。師継はこの別号を長男の忠季（幼名：妙光）の追墓のために寺に改め、妙光禅寺と号しました。龜山上皇（1249～1305）の帰依を受けていた無本覚心（法燈円明国師）を開山として弘安 8 年（1285）に招き入れられ、至徳 3 年（1386）の五山十刹制の改訂により京都五山の第八位に列せられることになりました。

妙光寺が被災したとする直接の記録は見当たらないものの、興味深い記録が東福寺の雲泉太極の日記『碧山日録』にある、応仁 2 年（1468）9 月 4 日、丹波の国人内藤元貞率いる東軍が、西軍の陣のあった仁和寺を焼討ちしたことを記した「東兵焼北山仁和寺、正印之御蔵司、來說寺中西兵擾乱」です。この日、妙光寺の南に隣接する福王寺神社も焼失しており、妙光寺は仁和寺とともに焼失、衰退した可能性が高いと考えられます（馬瀬 2014b）。

（10）城興寺城跡

平安時代後期の太政大臣藤原信長の邸宅を伝領した藤原忠実により寺院とされたもので、応永 6 年（1399）には室町幕府第 3 代将軍の足利義満から所領安堵がなされています。永正年間（1504～1520）に近隣の土豪である石井氏のほか、坊城俊名などが度々寺領の侵害をしていることが記録されています。地下鉄烏丸線の南進工事に伴う発掘調査により、幅 5.8～7 m、深さ 1.5 m、断面二段掘りの堀跡が検出されました。埋没時期は織田信長の築城した公方様御構（旧二条城跡）の埋没時期を同時期です（馬瀬 2006）。

4 まとめ

応仁・文明の乱をはじめ、戦国時代を通じて洛中・洛外の寺院は防御施設である堀（濠）で圍繞されていたことがわかりました。寺はその広大な敷地と、伽藍周囲を圍繞する堀（濠）や土塀、瓦葺の建物など、戦時の陣城として有効であるために戦場になりやすかったのではないのでしょうか。また、中世寺院は、応仁・文明の乱のはるか以前から僧兵や寺侍等の武力を有するだけでなく、戦闘行為を積極的に行っていた歴史があります。常に戦闘できる体制を有し、防戦できる装備を有し

ていたがために、また、積極的に紛争に介入してきた前史が、寺院自らを灰燼に帰す原因の一端があったと考えます。

<参考文献>

家崎孝治

2011 『平安京左京四条一坊十三町一壬生坊城町の調査一』（古代文化調査会）

2012 『本能寺城跡一平安京左京四条二坊十五町』（古代文化調査会）

馬瀬智光

2006 『京の城一洛中・洛外の城館一』（『京都市文化財ブックス』第 20 集 京都市文化財保護課）

2014a 「三鈷寺旧境内」『京都府中世城館跡調査報告書-山城編 1-』第 3 冊（京都府教育委員会）

2014b 「妙光寺境内」『京都府中世城館跡調査報告書-山城編 1-』第 3 冊（京都府教育委員会）

河内将芳

2002 「都市共同体と人的結合一法華一揆と祇園会をめぐって一」『都市 前近代都市論の射程』（青木書店）

酒井紀美

2011 『応仁の乱と在地社会』（株）同成社）

高橋成計

2014 「高雄城跡」『京都府中世城館跡調査報告書-山城編 1-』第 3 冊（京都府教育委員会）

水谷明子

2013 『平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡』（古代文化調査会）

中居和志

2014a 「神護寺境内」『京都府中世城館跡調査報告書-山城編 1-』第 3 冊（京都府教育委員会）

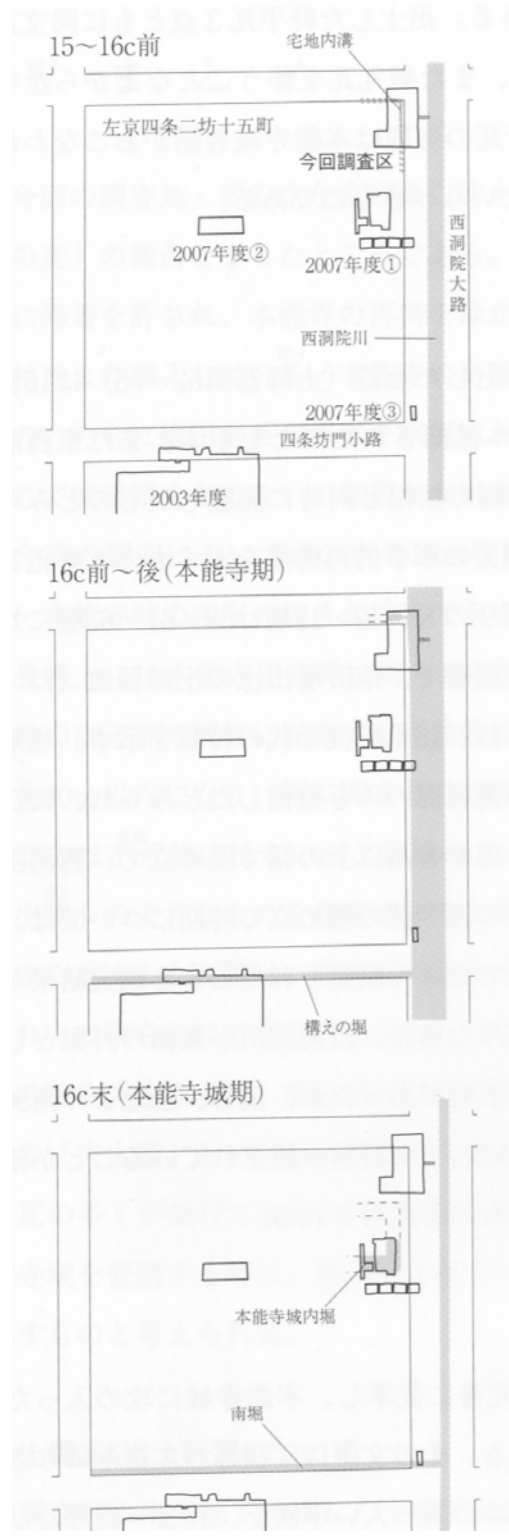
2014b 「如意寺跡」「如意ヶ嶽城跡」『京都府中世城館跡調査報告書-山城編 1-』第 3 冊（京都府教育委員会）

村尾政人・田淵成己

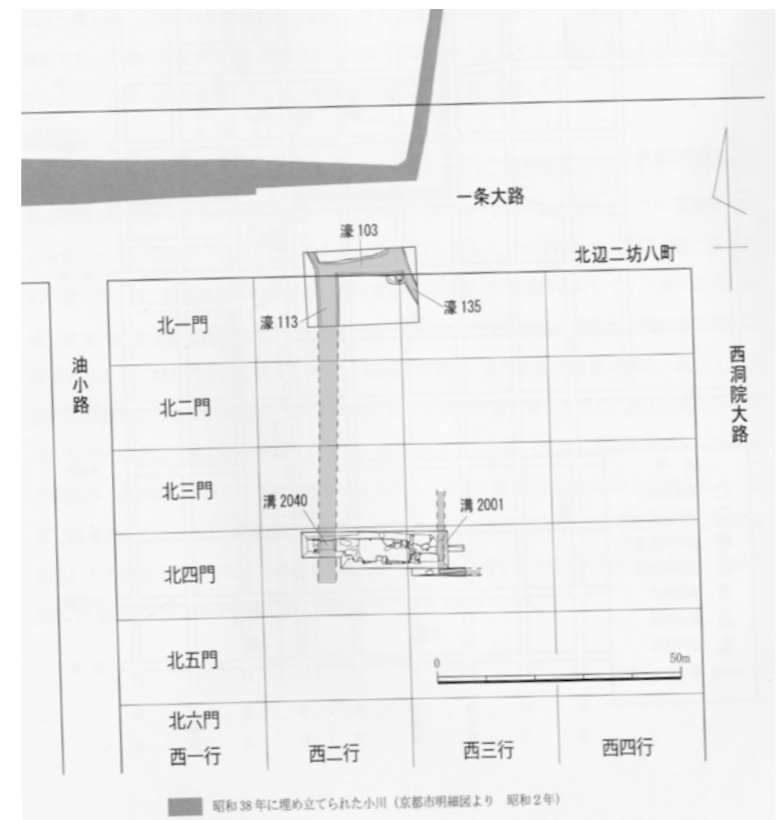
2013 『嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡発掘調査報告書』（『西近畿文化財調査研究所調査報告書』7 西近畿文化財研究所）

持田 透

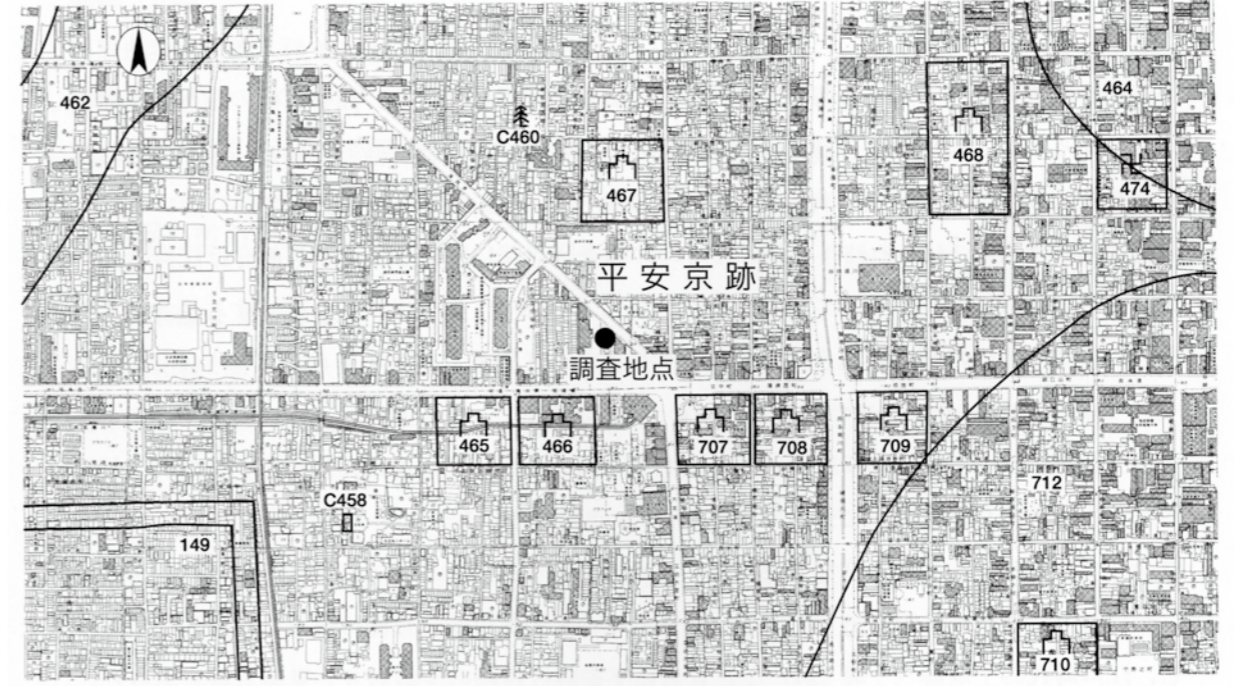
2013 『平安京左京北辺二坊八町跡一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第 4 輯（株）イビソク）



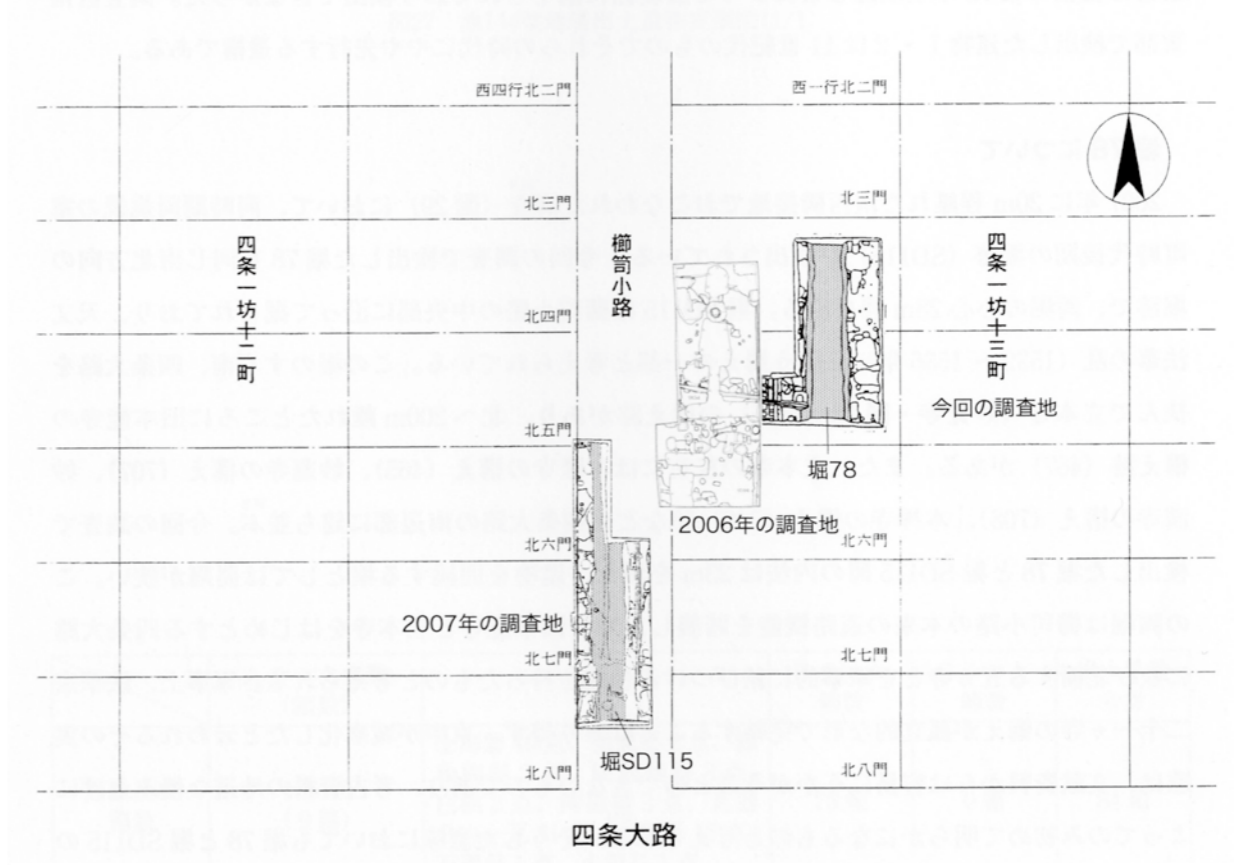
(3) 本能寺城跡の濠 (家崎 2012 から引用)



(5) 讃州館・讃州寺の濠 (持田 2013 から引用)



(4)-01 平安京左京四條一坊十三町(法華寺院)の濠：法華寺院と濠の位置 (家崎 2011 から引用)



(4)-02 平安京左京四條一坊十三町(法華寺院)の濠：二つの濠の位置 (家崎 2011 から引用)

図5



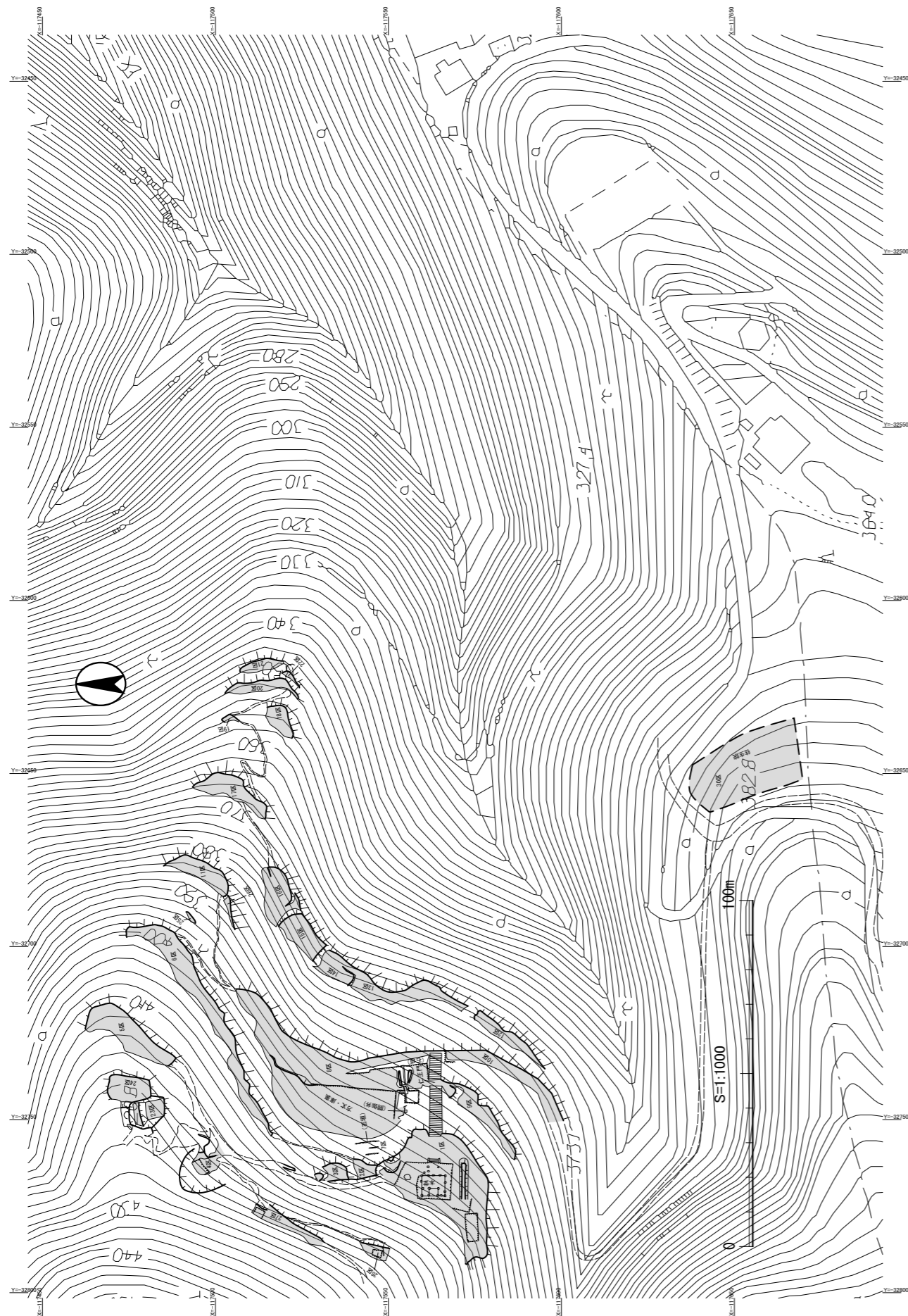
(6) 神護寺と高雄城跡 (高橋 2014, 中居 2014a から引用)

図6



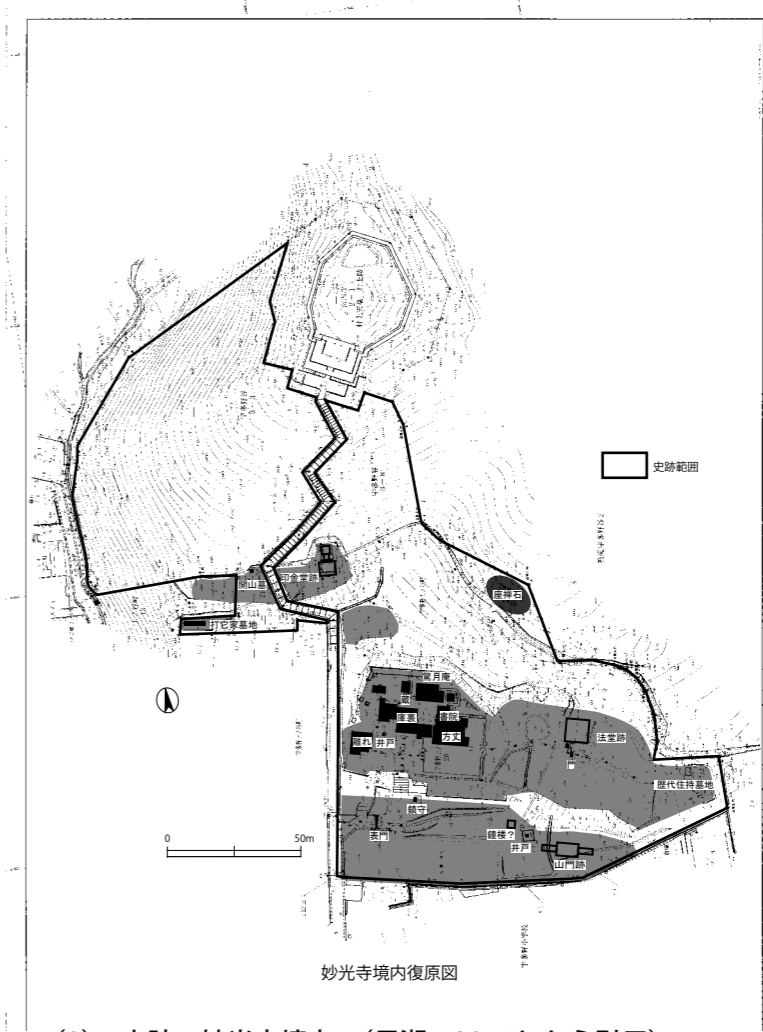
(7) 如意寺跡と如意ヶ嶽城跡 (中居 2014b から引用)

図 7

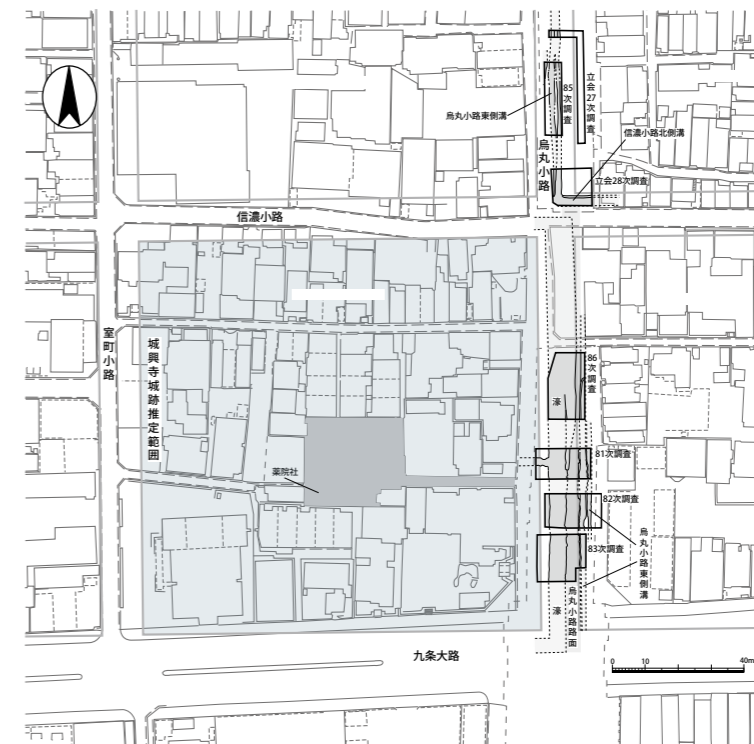


(8) 三鈷寺旧境内 (馬瀬 2014a から引用)

図 8



(9) 史跡 妙光寺境内 (馬瀬 2014b から引用)



(10) 城興寺城跡 (馬瀬 2006 から引用)